一般演題（口演）助産教育1

座長：齋藤いずみ（神戸大学）

O-29

# 看護学生におけるSOC（Sense of Coherence）とコミュニケーション・スキルとの関連 －実習の経験別による比較－

○河内浩美　池田かよ子
新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科

## Ⅰ　緒言

臨地実習は、対象者や臨床指導者らと関わりながら基本的な看護実践能力を習得していくが、一方で学生にとっては、慣れない環境下でありストレスを伴う学習活動でもある。また、コミュニケーションに苦手意識を持つ学生も多く、さらに負担となっていると思われる。近年、ストレスについては健康生成論の中核概念である首尾一貫感覚（Sense of Coherence、以下SOC）のもつ予防効果が注目されており、高いSOCの獲得は、有意義なストレス対処ができる能力を持つといわれている。

看護系大学の学生は、複数の資格取得に向け様々な実習が必須であり、中でも過密な実習を行う助産学生のストレスは大きいと思われる。そこで、筆者らは、取得資格による学生のストレス対処の傾向を捉える事は、ストレス対処能力の強化を考慮した学習支援に生かせると考えた。本研究は、その前調査として基礎看護学実習が終了した学生と領域別実習および資格選択別の関連実習が終了した学生のSOCとコミュニケーション・スキルの関連を検討することを目的として調査を行った。

## Ⅱ　方法

看護系A大学の基礎看護学実習が終了した2年生と領域別実習および資格選択別の関連実習が終了した4年生を対象に、SOC-13スケール（「有意味感」「把握可能感」「処理可能感」の3要素）とコミュニケーション・スキル尺度ENDOREs（以下ENDOREs）（基本的スキルの「自己統制」「表現力」「読解力」と対人スキルの「自己主張」「他者受容」「関係調整」の6要素）を用い無記名による自記式質問紙調査を実施した。各尺度の要素で学年別にMann-whiteney検定、4年生の資格選択別にKruskal-Wallis検定を行い、量的尺度間の関連において学年別と4年生の資格選択別毎に相関係数を求めた。倫理的配慮は、調査協力について調査内容の説明を行い協力を求めた。参加は自由意志であり、途中で中止しても一切不利益が生じないことを説明し強制力がかからない様に努めた。また、調査データは数値化し統計的処理を行い個人が特定されないこと等を紙面と口頭で説明し、質問紙の回答をもって調査協力への同意を得たものと判断した。

## Ⅲ　結果

有効回答116部（有効回答率81.1％）の対象者は、2年生79名、4年生が37名であり、4年生の資格選択別内訳は、助産学選択7名、養護教諭選択10名、看護師保健師のみ20名であった。

SOCの学年別では、「処理可能感」において2年生の方が有意に高かった（$p = 0.016$）。4年生の資格選択別では、助産学選択者の「有意味感」「把握可能感」「処理可能感」の数値が最も高かったが有意差は無かった。また、ENDOCREsの学年別および4年生の資格選択別においては、いずれも有意差は無かった。さらに、SOCとENDOREsの関連では、学年別の4年生にSOCの「処理可能感」とENDOCREsの「表現力」において、$\gamma = 0.45$とやや高い正の相関がみられた。

## Ⅳ　考察

基礎看護学実習の経験しかない2年生が4年生に比べて「自分に課せられた課題は解決可能である」という「処理可能感」が高かったのは、臨地実習に対する現実味がまだ薄いことから対処できるという感覚を持っていると推測される。SOCとENDOCREsの関連で4年生にやや高い正の関連がみられたのは、体験が積み重なっていく中で自分の考えや気持ちを表すことにより課題を解決できるという自信の現れではないかと考える。

## Ⅴ　結論

基礎看護学実習が終了した2年生と領域別実習および資格選択別の関連実習が終了した4年生におけるSOCは、2年生の方に「処理可能感」が有意に高かった。また、4年生のSOC「処理可能感」とENDOCREs「表現力」について、やや高い相関があった。